

チーム学習の情報共有における知的影響力の2チーム間の比較研究

A Comparative Study on Intellectual Influence by Information Sharing between Two Teams

望月 紫帆

MOCHIZUKI Shiho

NPO 法人学習開発研究所

NPO-Institute for Learning Development

西之園 晴夫

NISHINOSONO Haruo

佛教大学

Bukkyo University

宮田 仁

MIYATA Hitoshi

滋賀大学

Shiga University

要約 佛教大学の教職科目「教育方法学」の授業は、チーム学習と個人学習とを統合した学習による知識創造をねらいとしている。チーム学習をすることによって学生に充実感を与えたり、学友から学ぶことへの不安を解消することは可能であるが、専門知識を確実に習得させる方略は明らかではない。本報告では学習目標と満足度の高い2つのチームを例にとって学習状況を比較し、学習活動の違いから知識の増加だけでなく組織化するための情報共有の有効性を考察する。

キーワード チーム学習 知識の増加と組織化 学習目標 情報共有

1. 問題の所在

学習指導要領(1998)に記載されている「総合的な学習の時間」では、「新しい学力観」に基づいて学習の多様性が認められている。全ての学習者がその能力に応じて等しく積極的に学習に参加するためには、多様な評価方法と学習者の多様性を活かせる学習形態の設定が必要であり、その手段としてチームによる学習が有効であることを示している(西之園 2003)。学生はチームでの学習に達成感を得ることはできるが、学習の知識を増やし、得た知識を有効に利用してレポートにまとめることが不得意である。

2. 研究目的

本研究では、選定した2チームのレポートに使用されている単語の状況を分析することによって、チーム学習において専門知識を質的に向上させる学習の方法を明らかにすることを目的とする。

3. 研究対象

(1)教育方法学の授業

佛教大学で水曜日4限目に教職科目として開講している「教育方法学」は非常勤講師(滋賀大学 宮田仁)が担当しており、西之園が開発した教材を使用している。2005年度の前期は中学・高校の教職を目指す10学科の学生115名が受講していた。学生は5、6人ずつのチームに分かれてチーム学習を行う。学生は、チーム学習で得た知見を利用して最終レポートを個人でまとめる。

(2)比較するために選定した2つのチーム

選定した2チームは、学習の目標も満足度も高いが、効率を重視するか時間をかけて合意することを重視するかで異なり、その相違点を与える影響を比較した(表1)。

表1 選定した2つのチームの特徴

チーム	チームの特徴
T1	出席率や教育実践力到達度自己評価の平均が一番高い。お互いに常に感謝しあっている。講義時間外に集まったことは一度もなく、講義中に必要なことは話し合い、あとは分担して効率よく学習を進めた。
T3	レポートの目標レベルが全員トップレベル。講義時間外にも週1回2時間の割合で集合して自主的に学習をしていた。チームで決めた規範を遵守する度合いの高さに満足している。

4. 研究の方法

選定されたチームのレポートなどの提出物、出席状況、学習支援システム l-support(株式会社ネットマンの C-Learning)の掲示板に書き込まれた内容、学生のメールを多元的に解釈して分析した。

5. 結果と考察

(1)最終レポートの目標レベル

学生が最終レポートを提出する際には、必ず最後のページに目標レベルを示さなければならない。指導者は学生が示した目標レベルが妥当であるか否かを基準に沿って判定しながら成績の点数をつけていく。目標レベルは4段階で定められており、学生はそれぞれのレベルの到達条件を見ながら自

分のレポートがどのレベルに相当するか、あるいはどのレベルに挑戦したいかを決定する(表 2)。

表 2 目標レベルと到達条件

レベル 点数	到達条件
A* 90-100	教科書と配布資料の他 2 冊以上の文献を使用して、自分なりの考えを論理的に展開して説得力がある。
A 80-89	教科書と配布資料の他 2 冊以上の文献を使用して説得力のある文章にする。
B 70-79	教科書と配布資料を参考にしてレポートを作成する。
C 60-69	出席は十分しているがレポートの作成に時間をかけることはできないのでとりあえず出す。

2005 年度前期の目標レベルの割合をみると、授業時間外に配布資料や教科書以外の文献を読まなかったことを示す B レベルが最も高い(図 1)。

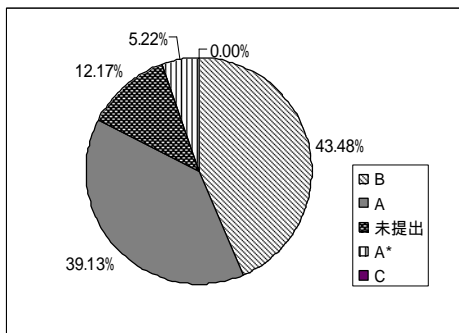


図 1 目標レベルの割合

図 2 のグラフは各チームの目標レベル申告状況である(該当チーム以外のチーム名省略)。

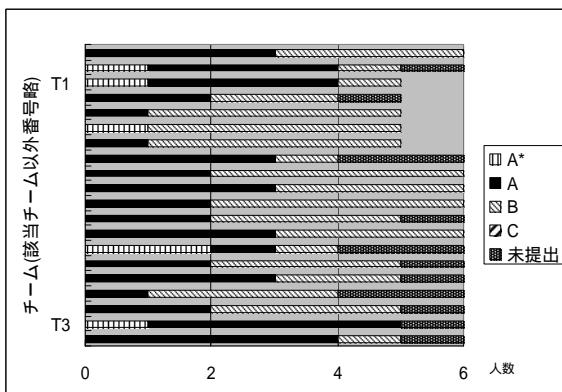


図 2 各チームの目標レベル申告状況

このグラフによると、T1 と T3 とは目標レベルが総じて高いことが確認できる。

(2) 目標レベルの高いチームの比較

これまでの研究で、チームへの満足度が高い両チームのレポートの内容を比較した結果、T1 は多くの単語を用いて知識を広げていたが、T3 は使用した単語数は T1 より少なかったものの各章の内容に一貫性をもたせ、学習を深めていたことが明

らかになった(望月ほか 2005)。加えて本報告では、学習の深まりを情報の共有率という視点から確認するために、レポート内で使用している単語で共通している数と、教科書や配布資料以外に使用した文献で 2 人以上が共有しているものの数を比較し、表 3 に整理した。

表 3 2 つのチームのレポートの比較

	学習型	各章の一貫性	専門時事単語数	全員共通単語数	2人以上で共有した文献数	講義時間外の集合回数
T1	分担合体	低い	191	2	3	0
T3	合意生産	高い	144	7	4	週 1 回

T3 メンバーの全員が共通して使用している単語数と 2 人以上が共有している文献数が多いことから T3 の方が情報共有率が高いと判断できる。T3 が講義時間外に自主的に集合していたことから、積極的に情報を共有し、時間をかけてアイデアの合意を図る合意生産型の学習をしていたことがわかる。一方、T1 も文献の共有率としては T3 と大きな差が見られなかった。T1 は集合しない代わりに学習支援システムの掲示板を活発に使用していた。

6 . 結論

合意生産型のチームは時間をかけて共有する問題を明確にするので、関連情報の共有率が高く、得た知識を説得力増強のために有効に利用し、レポートの各章に一貫性をもたせてまとめることができている。したがって、体験による満足に終わらない学習の質的向上のためには、情報共有による知識の増加と組織化で学習の深化を図るという知識創造をチーム学習の意義として指摘できる。

7 . 今後の課題

教科書と配布資料以外の文献を読まない学生が多いことの原因としてレポートを十分に練るための時間的余裕のなさが考えられるが、後期では前期の学生が参考にした文献を紹介したり、T1 の方略を参考にして文献情報の共有のための学習支援システムの掲示板の使用を促進したい。

西之園晴夫(2003) 知識創造科目開発における教育技術の研究 方法 教員養成における問題解決能力を育成する授業開発の事例, 日本教育工学会論誌, vol.27, No.1, pp.37-47
望月紫帆ほか(2005) チーム学習の満足度と学習成果の 3 チーム間の比較研究, 日本教育工学会第 21 回全国大会(印刷中)